

国立歴史民俗博物館の愉悦⑱

尾形家再現展示と地域の生業についてのモバイル展示



写真1 尾形家の盆棚の展示（夏期のみ展示）

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の総合展示第四展示室（民俗）では、生活の場としての「家」をテーマに、宮城県気仙沼市小々汐、尾形家の再現展示が行われている。小々汐は世帯数五〇戸ほどの気仙沼湾に面した漁村だった。尾形家は地域の総本家として近世は肝煎、明治期には村長も輩出し、イワシ漁の網元やノリ、カキ養殖などの漁業を統括してきた。

尾形家の主屋は築二〇〇年におよぶ茅葺き屋根の寄棟造の民家で、歴博では間取りの一部を常設展示するために現地調査を推進していた。しかし、二〇一一年の東日本大震災の津波によって家は全壊してしまふ。震災後、歴博は家材や生活用具の文化財レスキューに積極的に関わってきた。その結果、この再現展示では、ご先祖を祀る仏壇や土間の囲炉裏の一部に救出された家の部材を利用することになった。尾形家の展示は、生業、年中行事といった多様な生活の場を再現するという当初の目的に、震災の記憶と失われた生活文化の復旧への過程を紹介するという課題が加わった。再現された尾形家では、震災以前の盆と正月の行事に関わる展示を、毎年行っている。夏は先祖を迎える盆棚を設え（写真1）、正月には土間にウスとバケツ、オカミ（仏間）にはオトシガミやオミダマを展示し、門松にあたる松と栗の枝を縁側の柱に飾りつける。



写真2 尾形家展示の土間とモバイル展示

これらに加えて尾形家の生業、食文化を少し詳しく説明するために、文化財レスキューで見つけた日記資料と食文化の紹介を行うことにした。こちらはモバイル展示という形態で作成したが、コロナ禍で座敷部分の閲覧ができなくなったため、土間の一角に常設で展示している（写真2）。モバイル展示は、様々な場所に持ち運び、展示紹介を行うためのユニットである。尾形家の生業ユニットの一つでは、戦前の尾形家の日記から、イワシ網の漁と加工の様子、ノリ養殖、沿岸部でのアサリ掻きなど、海での生業に関する日記資料をデジタル化して公開した。もう一つのユニットでは、気仙沼での漁業歴史を示しつつ、沿岸部で取れる主な魚介類を紹介した。これらの資料には、震災前の聞き取りですでに失われていた行事や生業も存在する。

東日本大震災から一〇年以上が経過し、震災経験やその後の混乱の記憶も少しずつ薄らいできた。しかし、消えていくのは、被災の記憶だけではない。震災以前の生活の記憶や思い出も、色褪せていくようにみえる。実際、小々汐では、かつての村落の中心部が盛り土されて道路が走り、以前の面影はみられない。尾形家の主屋は再建の目処も立たないままである。かつての地域での暮らしの記憶は、復旧・復興の荒波のなかで、岐路に立たされている。このようなどき、地域社会の人々が何を選び、何を生活の基軸に据えるかを振り返る一助として、尾形家の展示もさらに展開していけるよう努力したいと考えている。

（国立歴史民俗博物館
研究部准教授 川村清志）